

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.79

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

日本の英語教育史における「グローバル化に対応した 英語教育改革計画」の意義について考える

松岡博信

教育再生実行会議は、平成 25 年 5 月 28 日に「これからの大学教育等の在り方について」の第三次提言を行い、その中で、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育を充実する」ことを掲げた。それを受けて、文部科学省は、同年 12 月 13 日に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック開催を見据えて、一気に日本の小・中・高の英語教育を国際的なレベルに引き上げようとしている。

これに基づき、英語は小学校中学年で「外国語活動」、高学年では「教科」として教えられ、モデル校における実証結果を今後の議論に反映させるとしている。また、英語教育推進リーダーを育てる研修事業も始まっており、外部専門機関と連携し、小中高合わせて 500 人程度の教員に 1 年間の研修を実施する。

今回の改善計画の目標は、小・中・高の各段階を通じて英語教育を充実させ、生徒の英語力を向上させることにある。具体的なものとしては、中学卒業段階で、英検 3 級～準 2 級、高校卒業段階で英検 2 級～準 1 級、TOEFL iBT 57 点程度以上の力を身に付けさせるというものである。さらに、英語教員についても外部検定試験を活用し、県等ごとの教員の英語力の達成状況を定期的に検証するとしている。その具体的指標は、全ての英語科教員について、英検準 1 級、TOEFL iBT 80 点程度等以上の英語力を確保するという壮大なものである。また、新学習指導要領を 2016 年度末までに改訂し、それに対応する教材および教科書を 17 年度末までに作成する計画である。新学習指導要領の全面実施は 2020 年度、東京オリンピックが開催される年である。国、県、自治体、民間などの役割担当も明記されており、これまでとは異なって、国が主導して改革に取り組む姿勢を見せる。

この改革計画が掲げる高等学校の目標は「英語を通じて情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」というもので、例として、ある程度の長さの新聞記事を速読して必要な情報を取り出したり、社会的な問題や時事問題について課題研究したことを発表したりすることができるほどの英語力を身に付けさせることであるから、これがもし計画通りに実現したら、明治時代に英語教育が始まって以来の大改革、大前進と言える。オリンピック開催と同期させたのは後付けであろうが、それが大きな目標であることは間違いない。

日本が先進国の中では最低の教育予算しか計上していないことは、周知の事実である。しかし、この英語教育改革の実現には膨大な予算措置が必要となる。アジアの中で最も遅れている日本の英語教育の改革に、今度こそは国は本気になって取り組む姿勢を見せる。しかし、この改革計画の中には、入試制度改革のことはほとんど触れられておらず、現在のままの入試体制と形態、問題内容では、計画における高等学校の目標は、到底達成されないし、改革の意義も小さいものとなると感じるのは、私だけであろうか。

そういう意味で、この改革の実施経過をこれからずっと注視して行きたいと思う。 (副支部長／安田女子大学)

平成 26 年度 総会・第 1 回 (通算 70 回) 研究例会 報告



サテライトキャンパスひろしま 604 中講義室にて (2014. 5. 24.)

日本英学史学会中国・四国支部 平成 26 年度総会, 及び第 1 回 (通算第 70 回) 研究例会は以下の通り開催され, 盛会裏に終了いたしました (参加者 17 名)。ご参加くださいました皆様に, 心より厚くお礼申し上げます。

日 時: 2014 年 5 月 24 日 (土) 13:00 受付開始

会 場: サテライトキャンパスひろしま (広島県民文化センター) 604 中講義室 (6 階)

〒730-0051 広島県広島市中区大手町 1-5-3 TEL 082-258-3131

支部総会 (13:30~13:50)

議長選出, 前年度活動報告, 会計報告, 会計監査報告, 新年度活動計画, 他

開会行事 (14:00~14:10) 支部長挨拶 田村 道美 (香川大学名誉教授)

シンポジウム (14:10~16:45) 「英学史研究とこれからの英語教育」

趣旨説明

コーディネータ 馬本 勉

問題提起「中学校・高等学校の教育現場から」

鉄森 令子 (広島県立祇園北高等学校)

提案 1 「教師と生徒が触れる英文を考える」

能登原 祥之 (同志社大学)

提案 2 「教室での実践史にヒントを求める」

隈 慶秀 (福岡県立明善高等学校)

提案 3 「訳読史とアクティブ・ラーニング」

馬本 勉 (県立広島大学)

指定討論「教員養成の側から歴史研究をみる」

保坂 芳男 (拓殖大学)

全体討議 (16:15~16:45)

閉会行事 (16:50~17:00) 副支部長挨拶

上杉 進 (元 高水高等学校)

懇親会 (17:30~19:30) 酒呑童子 (広島市中区) にて

シンポジウム

「英学史研究とこれからの英語教育」

問題提起「中学校・高等学校の教育現場から」

鉄森 令子 (広島県立祇園北高等学校 [非常勤])



今春から県立高校に加えて市立中学でも非常勤講師をしています。県立高校の多くは過密なシラバスのもと、生徒も教師も余裕がない状態かと思っています。中学においては私たちが学んだ頃とはすっかり教科書や授業形態が変わっており、毎日、現場で生徒たちに関わりながら、何が正しくて、何が違うのかと自問自答の日々です。

当日の発表を以下にまとめてみました。今回湧き起こった疑問点は時間をかけて調べていきたいと思っています。

(はじめに) 文科省が「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表した。

(1) 英語の授業は英語で？！

- ・現場での実状、和訳先渡し授業について
- ・教師の英会話能力発表の場ではなく生徒に英語を使わせる授業とは？

(2) 文法について

- ・「英語表現」2単位の中で教科書とは別に文法の参考書を指導するのは時間不足。
- ・旧課程においてはOCや英語Iの中で文法指導がなされていた。
- ・1973年～1981年の間だけ高校に「文法」単独の検定教科書があった。

(3) Can-Do リスト：到達目標は何か

- ・無理なシラバス。

(4) 授業形態

- ・高等学校の進学校においては習熟度別クラスでの授業。中学においては普通教室でPCとモニターを使用した授業。

(5) 小学校英語について

- ・教科にすると評価はどうするのか。教員確保はどうするのか。課題は山積みである。

(提言) 現代の問題解決のヒントを歴史から得ることはできないだろうか。

提案1「教師と生徒が触れる英文を考える」

能登原 祥之 (同志社大学)

本発表では、教師と生徒が触れる英文を考えるため、英学史の中でも日本人独自の言語観を叩き上げた斎藤秀三郎(1866-1929)とその具体的な著作『熟語本位英和中辞典』(1915)に範を求めることとした。



斎藤にまつわるエピソード、評論、そして、斎藤の用例を通して、(1) 用例を数多く集める、(2) 語と語とのあらゆる結びつきを研究する、(3) 動詞を軸に前置詞や副詞などを見ていく、(4) 構文と連想に注目する、(5) 百科事典の意味に配慮する、(6) 語源と意味の漂白化に配慮する、(7) さまざまな構文でパラフレーズできる、(8) 直読直解を意識し用例が選べる、といった8つの学びの姿勢をまとめ、時代が変わっても引き続き大切にすべきとした。

最後に、コミュニケーション重視の風潮の中で、物主構文や抽象名詞が含まれる英文に接することが少なくなり、用例を通して“英文を味わう”機会が教室から失われていることを指摘して終えた。

提案2「教室での実践史にヒントを求める」

隈 慶秀 (福岡県立明善高等学校)

現代的な問題解決の糸口を、明治以降の教室での実践史をヒントに見出していくということをテーマに掲げた。平成25年度より実施の新学習指導要領で「授業は英語で行うことを基本とする」

ことが明記された。そのためには内容理解と定着をはかる活動のバランスが必要である。



生徒に英語定着の時間を授業中に確保するために、神保 格 (1911) は「英語読本の講義を生徒に持たせる教授法研究」を唱えた。また神保と同じように教科書の「虎の巻」の有効利用を青木常雄 (1933) は論じている。いわゆる教科書ガイドでは学習できないことを工夫することをすすめる、教室で「教師も生徒も、出来るだけ多く英語を話し、英語を聞き、英語を読むのがいい。」と助言している。両者とも自律的学習者としての生徒が根底にある。最後に外国人英語教師の授業実践史を振り返ることは、ALT との協同授業を再考するための手がかりを提供してくれる機会となると思われる。

提案3 「訳読史とアクティブ・ラーニング」

馬本 勉 (県立広島大学)

幕末明治期以降の英語独習書を調べていくと、時代とともに学習法や訳文が変化の様子を見て取ることができる。こうした独習書で完結する学びもあれば、集団で行う訳読の方法も存在した。



学習者間の積極的な討論からなる「会読」は、

訳読の学びの一方法であった。相互コミュニケーション性や対等性を特徴とし、教育現場で今求められるアクティブ・ラーニングに通じるものである。コミュニケーションの対極に置かれる訳読も、その方法如何でアクティブな活動に変わり得ることを述べ、「会読」の再評価を提言とした。

指定討論「教員養成の側から歴史研究をみる」

保坂 芳男 (拓殖大学)

私は大学で教員養成にかかわっていますが、日々感じている問題点は大きく分けて2つあります。

- ①英語力が低いのに教員を目指す学生の問題
- ②正規採用になりながら3年以内に辞める卒業生の問題



まず、『教員の歴史』(唐澤富太郎著)をまとめる中で、いかに教員の社会的立地位が低下していったかについて述べました。次に旧制中学校の校史等にあるエピソードを紹介し、「生徒が求めてきた教師像」を模索しました。

最後は、戦前の中等学校教員養成を担っていた「文検」の歴史を紹介しました。

フロアーからの意見は、多岐にわたりましたが、含蓄深いものが多く、歴史学会ならではの感想と感じました。今回、上記の2つの問題点を深く考える良い機会となりました。ありがとうございました。

【参加者の感想】

◆提案者3名の先生方の研究分野は違いますが、結論としては、学習者の主体性や能動性を促すような教授法が必要ではないかということだったと思います。実践はなかなか困難かと思いますが、実現に向けてますますの工夫を積み重ねてください。期待しております。<Emma>

◆今回の企画は画期的で素晴らしいと思う。比較的小若い意欲的な先生方の presentation は大変よかった。おおいに触発された。

現場の英語教育は‘どこへ向かう’。指導のヒントを‘どこから’に求めてみる。

実践史、座談会（1. 訳させたらだめだ、英語でどしどししたずねる、2. 教師が前の晩に暗記するようでは会話も調子が出ません 教師側の問題）、訳読史（誠之館で使った兄の text に訳す順番の番号が書いてあったのを思い出す）等の提案に現在授業を成功させるヒントがたくさん見られた。

He has a good knowledge of Greek.(十分な知識を持つ)。これまで多くの教師は基礎を教えておけば（知識）あとは生徒が自分でやるのに任せていなかったか。knowledge = the information, understanding and skills that you gain through education or experience. (OALD) knowledge には skills が含まれ、経験によって得られるもの、従って learning by doing, 経験を重ねる=practice をしっかりやるということ。改訂の目玉は、一言でいうと‘use させよ’。知識を技術に。＜東洋美人＞

◆「これからの英語教育」というフレーズは古くて新しい、且ついつの時代でも問いかけられて来たものである。然し、小学校・中学校・高等学校と、すべての段階で英語の授業を英語で行うことが求められる世の中になると、現場は勿論、今まで英語教育に携わって来た者にも、可成りの動揺があるように思える。こうした時に、英学史研究の立場から何らかのヒントを探り出そうとする発想は、いかにも当然であろう。そして又、必ずや、今まで見逃してきたところに素晴らしい aid が発見されるのではないかと期待がある。

今回の各発表者の意気込みにも、そうした energy が感じられて、眠気の入り込む余地のない提案であった。＜風呂 鞆＞

◆私は日本語教育（外国人に日本語を教える）もしましたが、反対に英語教育と対比して考えてみることもするようになりました。こういうシンポジウムは全体的視野で語学教育がみわたせるのでよいと思います。＜古川正昭＞

◆問題提起に結びつけるのは難しかったのでは。「訳読も必要？」と「英語だけの授業」が英語教育史の中では何度もあらわれたのが分り、今回も同じではと感じました。歴史研究も意義がありますね。

＜田村真一＞

◆シンポジウムについて：当支部ニューズレター No.78 にシンポジウムの概要が予告しており、それ

をよく読んで参加させていただきました。シンポジウムの標題と各パネリストの発言内容には整合性が保たれていたと感じました。指定討論も標題と合致した内容で、とても勉強になりました。

コーディネータの見事な舵取りで、今後の課題も浮き彫りになり、実りあるシンポジウムでした。

＜もみじまんじゅう＞

◆鉄森先生：いろいろな観点からの発表でしたが、「中学校・高等学校の教育現場から」に絞って報告し、その問題点を具体的に英語教育史と関連づけられればと思いました。

・能登原先生：私の中・高で教鞭をとった現役時代、教材研究の主たるものは効果的な例文でした。私は手っ取り早く例文集に頼ることが多かったのですが、話を聞いて齋藤先生の辞書の偉大さを再認識しました。私も齋藤先生の辞書は持つのは持っているのですが、宝の持ち腐れだったとあらためて感じました。

・隅先生：豊富な資料を駆使されているのに感心しました。課題とされている「現代的な問題解決の糸口を歴史をヒントに見いだしていく」研究をさらに進めていただきたいと思います。

・馬本先生：訳読は「訳毒」などと言われて、「コミュニケーション能力育成」が声高に叫ばれる最近では人気がないようですが、母国語を活用して外国語を学ぶ方法は時間等の制約がある日本の学校教育では必要だと思っています。その訳読の歴史を丹念に研究されておられ、ヒントをいただきました。

・保坂先生：話を聞いて教員の社会的評価の変遷が興味深かった。一時行政で採用試験を担当したり、大学附属学校での経験から言っても英語ができるだけでは良い英語教員とは言えないことはもちろんであり、「英語教師の不易（流行）」で述べられたことは十分納得できる。その具体的実践を各大学に期待したい。＜JH4DGW＞

◆現代と過去を結ぶシンポジウムになり、英学史研究をもっと深める必要性を感じました。

齋藤の例文選定は授業のヒントにもなりました。

＜Kshu＞

◆パネラーの一人として僭越ながら問題提起をさせて頂きました。各大学で教員養成の中心を担って来られた先生方の前でのプレゼンは緊張しましたが、勉強になりました。文検の話や、岡山の成績優秀クラスの話などフロアーからの意見は大変参考になりました。ありがとうございました。数年に1度、こういうシンポを行います、企画のセンスの良さにいつも感心させられます。お世話になりました。

＜YH＞

平成 25 年度 日本英学史学会 中国・四国支部 会計報告

収入の部		支出の部	
繰越金	235,119	通信費	20,700
年会費	129,000	紀要印刷費	61,740
紀要掲載料	16,000	ニューズレター印刷費	8,225
紀要売上	4,000	講師謝礼	20,000
補助金	16,000	事務費	1,116
ゆうちょ銀行利子	33	会議費	17,897
		事務用品	2,011
		慶弔費	13,171
		雑費	5,250
収入合計	400,152	支出合計	150,110
		次年度繰越金	250,042

以上、ご報告申し上げます。

2014 年 5 月 11 日

会計担当理事 鉄森 令子 ㊞

平成 25 年度 日本英学史学会 中国・四国支部 会計監査報告

各位

本学会の会計を、収入並びに支出に関して、それぞれ関係書類及び領収書等により監査いたしました。その結果、会計報告の通り、全て適正、正確に会計処理ができていたことを確認いたしました。

以上報告いたします。

2014 年 5 月 13 日

会計監査 堂鼻 康晴 ㊞

会計監査 平本 哲嗣 ㊞

英学史学会全国ニュース

>> 「日本英学史学会報」No.134 (10 月 1 日付)

会長雑感(1) (塩崎 智)

《英学史散策》

日本英学史の行方：サイバースペースに挑むか

(堀 孝彦)

本田増次郎と村岡花子の「一場のロマンス」

(長谷川勝政)

私と英学 (滑川明彦)

《支部活動報告》

※支部活動報告として、中国・四国支部平成 26 年度総会ならびに第 1 回 (通算 70 回) 研究例会報告、『英學史論叢』第 17 号の目次などが掲載されています。

>> 『英学史研究』第 47 号

2014 年 10 月 1 日発行。掲載論考は次の通り。

〔論文〕

「美術使節」としての岡倉由三郎：

1930 年代初めの「日本」の語りについて

(平田諭治)

幕末駐日イギリス外交官の日本語文書翻訳

(楠家重敏)

第 50 回全国大会口頭発表レジュメ／彙報ほか

※日本英学史学会（本部）の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です。詳細は学会ウェブサイトをご覧ください。

>> 第 51 回全国大会

2014 年 10 月 18 日 (土) ～19 日 (日), 福井大学
文京キャンパス (福井市文京 3 丁目) にて。

10 月 18 日 (土) 総合研究棟 I 13 階

12:00 受付開始 12:30 開会式

13:00～14:00 総会

14:30～16:10 記念講演【一般参加可】

牧野陽子「グリフィスとハーン：日本体験を
めぐって」

平川祐弘「ラフカディオ・ハーンの英語授業：
黒板勝美のノートから」

17:30～20:00 懇親会 (ユアーズホテル)

10 月 19 日 (日) 工学部 3 号館 1 階

9:30～14:40 研究発表

※本支部会員の発表は次の 2 件

奥村紀子「オバマのオバマ (日米地域間交流)」

馬本 勉「独習書の分析を通じた訳読の変遷に
関する研究」

10 月 20 日 (月) 越前大野見学

8:00～ 県立大野高校図書館, 大野市歴史博物館
ほか

※日本英学史学会 (本部) の会員登録をされていない方
ご参加希望の方は、支部事務局までお問い合わせください。

英学史情報ひろば

◇田村道美 (2014) 「Jane Austen と 18 世紀の海
浜・温泉保養地」『英語と英文学と：田村道美先生退
職記念論文集』pp.3-12.

◇竹中龍範 (2014) 『『English』誌をめぐって』『英
語と英文学と：田村道美先生退職記念論文集』
pp.91-100.

◇竹中龍範 (2014) 「重野健造『英語教授法改良案』
をめぐって」『英語教育学研究』5, pp.21-30.

◇竹中龍範 (2014) 特別講演「香川大学神原文庫の
英学・洋学史料」2014 洋学史学会地方大会 (9 月 6
日, 香川大学教育学部)

◇風呂 鞏 (2014) 「ハーンの『むじな』：その魔術
的な技法」『へるん』51, pp.15-18.

◇五十嵐二郎 (2014) 「教育活動における行動・感
情・思考：恩師回想とともに」『The Cornerstones』
35, pp.2-3.

◇小泉 凡 (2014) 「〈小泉八雲記念館〉再発見 この
逸品 (16) 横木富三郎関連資料」『へるん』51,
pp.65-66.

◇小泉 凡 (2014) 「七年ぶりにアイルランドへ」『へ
るん』51, pp.70-74.

◇馬本 勉 (2014) 『『パーレー万国史』独習書に関
する研究』『英語と英文学と：田村道美先生退職記
念論文集』pp.53-62.

◇馬本 勉 (2014) 「関係代名詞の訳出法：その変
遷をめぐって」日本英語教育史学会第 249 回研究
例会 (9 月 21 日, サテライトキャンパスひろしま)

◇第 165～170 「広島ラフカディオ・ハーンの会」
ニュース (2014 年 5 月～10 月)

浅田栄次没 100 周年記念行事

日時：2014 年 11 月 1 日 (土) 13:00～15:30

場所：周南市立中央図書館 3 階 集会室

主催：徳山英学会

共催：周南市・周南市教育委員会

記念式典

挨拶 (周南市長 ほか)

「浅田栄次ものがたり」DVD 披露 ほか

記念シンポジウム

「浅田栄次の伝えるもの」

コーディネータ 保坂芳男

パネリスト

河口 昭「揺籃期の浅田栄次」

柳元宏史「旧約聖書学と浅田栄次」

高橋作太郎「東京外国語学校と浅田栄次」

五十嵐二郎「英語教育と浅田栄次」

問合先 ※河口 昭先生まで

〒745-0005 周南市児玉町 3-8

電話 0834-21-0074

中国・四国支部事務局より

>> 年会費納入のお礼とお願い

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費（一般 3,000 円、学生 2,000 円）をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方は下記口座までよろしくお願いいたします。

(口座番号) 01360-9-43877 (加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部

>> 紀要の配付と販売について

研究紀要『英學史論叢』は、会員の方へ一部ずつ、研究論考・研究ノート執筆者には所定の部数をお渡ししています。最新号やバックナンバーをご希望の方には、一部 1,000 円（非会員 1,500 円）にて販売いたします（郵送料込）。

バックナンバー収載の研究論考等のタイトルは、ウェブサイトにてご確認ください。

[http://tom.edisc.jp/eigaku/bulletin/
eigakushi-kaiho-ronso.htm](http://tom.edisc.jp/eigaku/bulletin/eigakushi-kaiho-ronso.htm)

詳細は事務局までお問い合わせください。

>> 『英學史論叢』第 18 号原稿募集

日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第 18 号（2015 年 5 月発行予定）の原稿を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、以下に掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。

・研究論考・研究ノートを投稿予定の方は、事前に「投稿申込」をお願いします。2015 年 1 月 31 日までに事務局へ、メールまたはファックスにてお申し込みください。

メール: eigaku@tom.edisc.jp

ファックス: 0824-74-1725

・原稿提出の締切は、**2015 年 2 月 20 日**（消印有効）です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートは、正副計 3 部をお送りください。英学史随想、書評等は 1 部お送りください。

>> 訃報

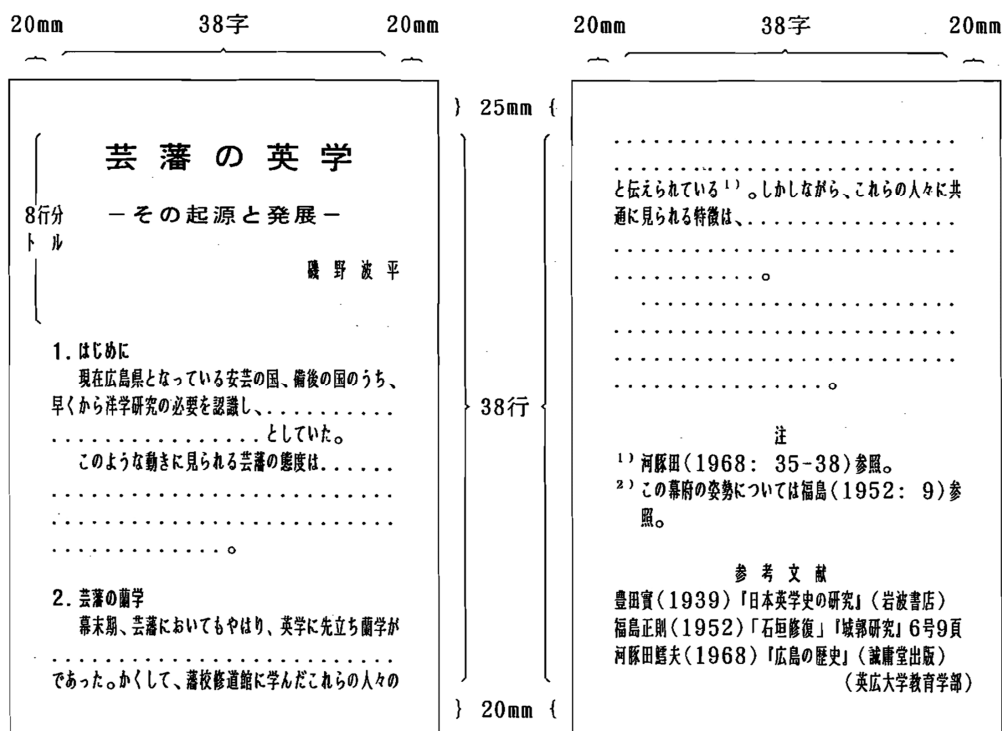
定宗一宏先生 5 月 10 日ご逝去。支部創設時の支部長として、長く顧問（相談役）をお務めくださいました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

『英學史論叢』執筆要領

- ・『英學史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
- ・研究論考・研究ノート、その他のものとも、原則として提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれも標準書式に従った完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいたものは受理しないことがある。
- ・研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副 3 通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会が必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。
- ・研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め、10 ページ以内とする。
- ・掲載決定後の最終原稿はプリントアウトしたものと合わせ、電子媒体によるデジタルデータを提出することを原則とする。
- ・研究論考・研究ノートの掲載料は 1 編につき 3,000 円とする。ページ数を超過した場合は、1 ページにつき 1,000 円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。
- ・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として 2 ページ以内とする。

『英學史論叢』標準書式

- ・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。
- ・本文は、10ポイントないし10.5ポイント文字を使用し、1行あたり38文字、1ページ38行の書式によって作成する。
- ・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18～20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
- ・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴシック体とするか、下線を施して見やすくする。
- ・注は、脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
- ・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。
- ・英字・数字はすべて半角文字とする。



追悼記投稿のお願い

『英學史論叢』第18号に、本年5月にご逝去なさいました定宗一宏先生を偲ぶ「追悼記」を掲載したいと思っております。会員の皆様方に多数ご寄稿いただきたく、お願いを申し上げます。タイトル、および本文(全角38字×30行以内)を、本号に掲載の『英學史論叢』標準書式に沿ってB5判1ページにまとめ、事務局まで1部、お送りください。多数のご寄稿をお待ちしております。

追悼記締め切り：2015年3月31日

広島英学史の周辺(45) 痛ましい災害が続き、胸が痛みます。危機を回避する対策とともに、突然の事態を受けとめる

「心の備え」が必要なかもしれません。ここでもやはり、基本は日々のコミュニケーションでしょうか。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.79

2014 年 10 月 10 日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 田村道美)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.79